

第4回米百俵賞受賞

(平成12年6月15日表彰)

秋尾 晃正 (東京都練馬区)



タイの子どもたちの中学進学を支援する「ダルニー奨学金」事業を続けるとともに、ラオスの子どもたちに対しても支援活動を行った。

■受賞時プロフィール

日本にいる留学生たちを夏休みに北海道でホームステイさせる草の根交流運動をしていた秋尾氏は、そこで知り合ったタイの留学生の勧めで昭和62年春、タイ東北部を訪れ、その貧しさに驚いた。たまたま立ち寄った農家に、幼いダルニーちゃんがいた。

タイ東北部はお金がないために中学進学率が低く、子どもたちの多くが小学校を出るとすぐ働きに出る状況であった。1,500 バーツ (当時約1万円) あれば中学校に行けることを知った秋尾氏は、教育支援の開始を決意し、彼女にちなんで、この教育支援を「ダルニー奨学金」と命名した。

帰国後、秋尾氏は「年1万円でタイの子どもを中学校へ」という国際教育里親運動を開始。「日本国際交流センター」を設立し、友人たちに呼びかけ41人分の奨学金を集め、翌年春にタイに届けた。

2年目には運動が新聞で報道され、600余名から寄附が集まった。ところが小学校を訪問し、中学校に行きたい子を募っても誰も手を挙げない。途方に暮れた秋尾氏だったが、ある晩、友人の父が村人をお寺の境内に集めてくれた。そこでとっさに「米百俵」の教育の精神が今日の日本の発展に寄与していることを語った。話し終わった後、一人の男の子が手を挙げた。「俺、中学校へ行きたい。親孝行したい。村のために何かをしたい」

他の子どもも一斉に立ち上がり、同じことを叫びだした。その後も村々で「米百俵」の故事を話し、教育の重要性を説いて回った。お米に親しみを持つタイの人たちに「米百俵」の故事は共感をもって受け入れられたという。会津藩出身者を祖に持つ秋尾氏は、若い頃に聞いた「米百俵」の話に感動を覚え、「ダルニー奨学金」を始めた根底には「米百俵」の精神があったと語る。

こうして、当初 41 人分の奨学金でスタートした「ダルニー奨学金」は、ロコミなどで支援者の輪が徐々に広がって



▲ラオス・カムアン県の学校で勉強する子どもたち

いった。

平成 9 年、奨学金支給対象をラオスの小学生にも広げ、平成 12 年現在、毎年 8,500 人以上の奨学金提供者の支援により 15,000 人以上のタイやラオスの子どもたちの進学の実現をかなえるようになっている（新潟県では 154 名の奨学金提供者が 235 人の子どもたちを支援）。

■受賞後の活動

令和 2 年現在、ダルニー奨学金の支援対象国はタイ、ベトナム、ラオス、カンボジア、ミャンマーに広がり、これまでに約 413,600 人以上の子どもたちの中学就学が実現している。

■主な受賞歴

- 昭和 59 年 国際交流基金第 1 回国際交流地域振興賞
- 昭和 59 年 ソロプチミスト日本財団千嘉代子賞
- 昭和 60 年 児童図書部門厚生大臣賞